全体会　記念講演「障がいのある子どものニーズに寄り添う支援

～支援教育の動向と今後の課題～」

愛媛大学の花熊曉(さとる)教授に上記のテーマで講演していただきました。

まず愛媛のゆるキャラである犬の「みきゃん」が巨大なスクリーンに登場し、大阪府支援教育研究会（以下、大支援研）の創立６０周年をお祝いしてくれました。

講演は３部構成で、第一に、花熊先生のお父様である花熊四郎先生の事績について、大阪府教育委員会の特殊教育専任指導主事から文部省事務官となり、知的障害養護学校の学習指導要領作成にあたり、教科の枠組みで構成されつつも「一部もしくは全部を」合わせることができるよう現場の「領域論」の思いを盛り込むために粉骨砕身されたことや、ご自身の支援教育との関わりについてお話していただきました。

第二は、支援教育の観点に立ったユニバーサルデザインの授業づくりや個の違いを認め合い、尊重しあう学級集団づくりのポイントについて具体的に教えていただきました。①教室環境の整備　②肯定的で多面的に見る教師の子どもへの接し方　③学習や行動のルールの明示　④子どもが学習内容や授業の過程に見通しをもてるわかりやすい指示・説明　⑤一人ひとりの学習プロセスや学び方を尊重　⑥自尊感情・自己肯定感のもてる授業　など…。

第三は、「発達障がい」の青年・成人に見られる困難や課題から、概念的スキルに加えて子どもの将来に必要となる力として社会的および実用的スキルを身に付けさせること、自尊感情・自己肯定感を育てること、キャリア教育の意義と長期的な観点に立った支援・取組みの必要性についてお話されました。

そして最後に、先進的に取り組んできた大阪府の支援教育の視点はインクルーシブ教育そのものであり、今後も全国に発信していくことを期待されつつ、「大支援研」にエールを送ってくださいました。

花熊先生は２時間近く立ったまま熱い思いを語られ、支援教育に幅があっても参加者の多くの人が感銘を受け、学ばせていただいた講演でした。

全体会に参加された方のアンケートから（感想など　おもなご意見）

小学校

・支援教育の課題の中で「学級と授業の在り方の見直し」について、特別支援コーディネーターとして、通常学級の担任の先生方に、分かりやすく納得してもらい、学校全体として取り組んでいかなければならないと思いました。特別支援教育は、支援担だけが取り組むことではなく、一人ひとりの違いを互いに認め合い、尊重しあえる学級集団作りが必要という認識・意識を高めていくことが、これからの課題であると思いました。

・支援学級の子どもたちに対して、支援すること、その手立てなどばかり考えてきましたが、その子どもたちも他者のために何かをする経験、それによって自信がつき、自尊感情が高まり、いい循環になっていく、当たり前のことですが気づかずにいました。支援計画をまた見直してみます。

・特にキャリア教育の視点で「言葉遣い」や「身だしなみ」、適応行動を考えたスライドの新しい発見がありました。「障がいのある子どもが周りの人のために何ができるか」ということに目を向け、存在価値を見出すことを常に頭の中においておきたいです。

・最後のスライドが大阪の取り組みが目指してきたものと考えます。４つの領域がつながっていることがそれぞれの領域で中心的に取り組んできた人々が意識し、理解し、支援教育の視点でつながることが大阪のこれからの取り組みと考えます。行政（府教委、市教委）もそのことに向けて舵取りをしていただけるとありがたいです。小中高の取り組みに加えて、就学前や乳幼児健診からの家庭支援や親支援を一層充実させることが重要と考えます。家庭での子どもの役割、子どもの仕事を親と一緒に考え、実践できたら素晴らしい。
・日頃まとまりのない考えがすっきりとした講演でした。勤務する小学校では、支援学級２クラスとは別に、不登校児童を中心に集う生徒指導ルームがある。少人数だが、支援学級の児童より大きな課題を抱え、一人ひとりの今後に心労をそそいでいる。学力が低いが、支援学級への入級は拒否、学習はできるが気ままな登校で教師を翻弄している、掃除は嫌・暑いから嫌など理由をつけ帰宅したがる、基本的なことができていない状態。小学校で、基本的な生活の充実を得るために、親や他機関との連携の必要性と一貫性の重要性を感じた。
・小学校のうちからキャリア教育が大切なことがよく分かりました。保護者・教師は、つい目先のこと(学習がおくれないようにすること)ばかりに目がいきがちですが、将来、社会で生きていくために大事なこと、「当たり前のことを当たり前にしていける力」を身につける必要性を痛感しました。他にも他者のために役立つ体験、多面的な見方をする、身だしなみの意義など、大事な視点に気づかせていただきました。
・小学校では学習（読み書きなど）課題をすすめていく部分が多いなと思っています。（保護者の要望もあります）しかし、今日のお話で改めてソーシャルスキルの大切さを感じました。支援の必要な子も必要でない子も社会で生きていくためのルール、マナーをきちんと教えていかなくてはと思いました。
・キャリア教育と支援教育のお話はその通りだと思いました。学校を中心に考えてしまうので、その子が問題なく学校生活を送ればいいと考えてしまいがちですが、よく考えると学校を卒業してからの方が人生において長い時間ですよね。教育の目的が人生の質の向上であるという言葉が印象に残っています。現在関わっている子の中にあいさつ、返事などが難しい子がいます。その子が少しでも社会的行動ができていくように一緒に頑張りたいと思いました。
・「あたりまえ」を疑ってみるという言葉が大変心に残っています。毎日の生活の中で、子どもたちに「これが当たり前」と深く考えもせず話したり、提供してきたりしたことがたくさんあるのではないだろうか・・、と思っております。そして、できないからやらない！にならないよう、「したくなくても、しなくてはいけないことは、やらなければならないこと」を子どもたちに納得がいくように具体的にどのような支援や言葉が必要なのかを考えさせられるばかりです。
・分かりやすい話し方、内容でした。今まで自分なりにいろいろ考え、工夫し行ってきて一応の達成感を持ち、意欲も持ち続けています。今日のお話で、もう１ランク、２ランク上げた支援、きめ細かな支援をしなさい！と背中を押されている気持ちになりました。話を聞きながら今後すべきことが浮かんできました。
・自閉症教育の「構造化」のところで、「構造化」することが目的でなく、その中で何をどのように学ぶかが大切だということが印象的でした。自分自身も当たり前だと思って深く考えていなかったので、新しい感覚でした。今後、「あたりまえ」を疑ってみたいと思います。
・今回は支援教育を考える上で根源的な視点を学ばせていただきました。最初の話では、先生の立ち位置というか支援教育に携わられている根っこの部分を教えていただけ、その後での先生のお話にこれまでより熱意や思いをより感じることができました。また、医学的モデルとしての機械的な支援でなく、ニーズスペックとしての子どもの困り感やニーズからスタートする支援教育の考え方は子どもの現実からスタートすることを大切にする大阪の教育の流れにまさに合致するものだと思いました。
・小学校だけでなく、幼保から小中高での様々な実践についてわかりやすくお話していただき大変勉強になりました。そして、学校生活だけでなく、将来就労や社会人として生きていくことまでも見据えた話を聞けたことがすごく良かったです。日頃、つい目の前の細かいことにとらわれ、支援、指導し

ている自分ですが、どのように生きていく力をつけるかを考えた上での支援が必要と思いました。「キャリア教育で最も大切なのは小学部である」という言葉が心に残りました。そして支援教育の視点がすべての児童生徒のためのものであるということが、胸の中にストンと落ちた気がしました。

・先生のお話を聞いて、もう一歩踏み込んで先を見て支援を考えていかなければと思いました。今まで、本当に困っていることに添って何ができるかという視点ばかりで見ていたような気がします。そうではなく、「この子は周りの人のために何ができるのか」という考え方に、頭を打ったような気がします。結局、自己肯定感や自尊感情の先には“存在価値”があって、それは集団の中でしか育てられないものもあると思うと、やはり、クラス集団の環境としての重要さを改めて感じました。

中学校

・自分の問題意識ととてもマッチした話でした。授業の中で多面的な見方を教師が出来ているのか、できないことや、まちがうことが大切にされ「なぜできなかったんだろう。」「なぜまちがったんだろう。」と逆にまちがいが授業の深まりにつながるようにやっていきたいと思うのですが・・。しかし、現場は、時間は足りないし、教える、覚えさせなくてはいけない内容が多すぎです。子どもたち一人ひとりの表現さえ保障している時間がないのが現実な感じがしています。学び方が分かれば量は関係ないといいたいところですが、「教科主義」は相変わらず強いのです。教科と領域のバランスは教師一人ひとりの責任でやるわけですが…。

・大変わかりやすく自身の授業の参考になった。内容が盛りだくさんだったが、発達障がいの子どもたちが、成人になると「生きにくさ」に直面していくんですね。日本社会がもっと懐の深い社会になることを願います。今は何か違うと排除されてしまう、自分のことで精いっぱいの社会のように思えます。発達障がいの人たちは理解とちょっとした支援で働ける場がたくさんあるのにとても残念な気がします。

・多方面の話が聞けて参考になりました。キャリア教育、社会に出てからのことを踏まえた教育の大切さを痛感いたしました。現在、支援学級担任ですが、通常学級ではおとなしくて座っている生徒も支援学級では、甘えも出て行動が派手になり、叱る場面もあります。対応の難しさを感じます。日々勉強の毎日ですが、長いスパンでの教育を目指していかないといけないと思いました。

・父子二代の支援教育の足跡を見させてもらいました。幼くして亡くなられたお父さんへの思いがお話をより印象深くしました。中でも、キャリア教育のお話は、共感しこれから追求していきます。ありがたいことに２５歳くらいになった教え子と今も付き合い、就職についてリアルな話を教えてもらいます。その経験は現在の中学生にフィードバックできます。要はコミュニケーション力です。

・キャリア教育が学校活動の全ての場面で意識されるべきだと思いつつも、何となくあいまいな毎日を過ごしていました。授業中や学校生活における言葉づかいでパブリック、プライベートを意識させるということは、意図的に自分自身も取り組もうと思いました。今、不登校生徒と活動していますが、将来を見通し、今を生活するため、基礎体力、基本的生活習慣、身だしなみ、あいさつ、家庭での役割、働くことの意味など保護者と連携を取りながら今後取り組んでいきたいと思います。

・中学校にもなると、保護者からは「本人の自立に向けて」ということばがよく出てきます。進路を考える時期ということもあり、中学校になってようやく本人の将来をしっかり考える時期を迎えているような感じです。今日キャリア教育の話にもありましたが、中学校になってから「こうしよう」「こうなってもらいたい」と思っていては遅いということを痛感しました。しかし、中学校の３年間でもつけてあげられる力はたくさんあると思うので、できるだけたくさんの力をつけて卒業していってもらいたいと思います。

支援学校

・支援教育の観点に立った教育の大切さを教えていただき、また学校に戻って頑張ろうと思いました。いつか通常学級へ行った時も今の経験がユニバーサルな授業をするのに必ず役立つと信じて努力しよ

うと強く思いました。みきゃんがかわいかったです！

・学問的理論に基づいた実践紹介が数多くあったと考えていました。キャリア教育の充実も小からの重要性を知るために「やらねばならないことは、やらねばならない時にやらねばならない」保護者の「したくないことをこの子にさせないでください」という言葉だけに任せてはならないという事例などが印象的でした。授業づくり、集団作りの重要性。特に自尊感情や自己肯定感を育てるために授業とのコラボが必ず不可欠ということがよくわかりました。長期的な観点に立った視点こそこれからの重要な実践だと信じるご講演でした。

その他

・担任時代を振り返りながら、クラス経営などしていた頃を思い出しました。子どもたちの自立に向けての支援がとても大切であること。気づき等個性として学級でお互いを認めあえるクラスを目標に常にクラス目標を「〇〇（私の名前）ファミリー」として絆深く関わったこと、支援学校に進学した子も高校に進学した子と対等に接していたことなど・・・なつかしかったことでした。今、教育委員会におり、直接関わることはできませんが、巡回相談等で学校を支援する立場でよりプラスに励みたいと思いました。

・自立に向けての青年期の子どもを持つ母親です。身辺自立・社会性の獲得などは本当に大切だと痛感しています。自分では、その時その時で精一杯やってきたつもりですが、学びにくい子どもたちなので、限られた条件の中ではなかなか身につかないのが現実です。各々のサイクルで、しっかり親をサポートしていける専門家・専門機関が少ないです。（すぐ相談したいのに待機させられることが多い）親が悩みをすぐ相談できる、相談できるだけでなく、適切で見通しを持って指導できる人・機関が各々の地域で必要だと感じます。

・今まで発達障がいの子どもの支援についての講演を聞くと必ず、その子の「個性」として受け止めて！というメッセージが大きく発信されていることに、プレッシャーを感じてきていました。個性として、その子の理解ができれば話は早いのですが、学校は普段から様々な問題が起き、発達障がいのある生徒以外にも手がかかるので、今日の花熊先生のお話はそんな現場の状況をふまえた上での具体的なアドバイスで、ほっとする思いです。特に、お礼やあいさつができるといったコミュニケーション上の基本的な要を押さえること、基本的な生活リズムを整えること、授業中の言葉づかいの注意などが、社会的スキルの向上につながることを信じていこうと強く感じました。

・聴いていて納得できることばかりでした。「構造化」は何も特別な事ではない、常日頃私たちの生活の中、どこにでも見られることだと私も訴えています。周りの世界をわかりやすくすることは、全ての子ども達にとっても必要な事だと思うのです。ただ先生がおっしゃったように衝立やカードを使う事が構造化であると思われるのは残念です。まず環境を整え、混乱しやすい彼らがコミュニケーションを取ろうと思える相手が自分のつらさ、しんどさをわかってくれるという共感からまず始まるのではないかと思っています。自己肯定感、自己達成感をいかに学校生活の中で得ていくか、これによって大人への道がかわっていくのだと私も痛感しています。

・特別支援教育士として花熊先生の話をお聞きするのが楽しみです。より詳しくまとめられたハンドアウトがとっても役に立ちます。就労についての話がとっても興味があります。

・昔々、研修会に参加した時によく先輩方から「花熊先生、花熊先生」とお話しされる声を聞いておりました。珍しいお名前なので身内の方だろうとは思っておりましたが、ご子息だったのですね。お若くして亡くなられたのにあれだけの名声、ご努力ご検討が如何ばかりだったかと拝察いたしました。今日のご講演で保護者が「厭がることはさせないで！」と陥る誤りは、支援者が如何に“厭がる”ことを軽減するかを保護者とともに考えることですね。当たり前のこととして身につけられるようにするために！禁止の多い現場“感謝、ねぎらい”が多くなる現場になりたいものですね。